

50年ぶりの卒業論文

1973年(昭和48年)に書き上げた卒業論文(専攻科)「消費者運動の考察」が思いがけず見つけ、手元に届いた。50年ぶりに読んで、いまにつながる指摘を感じる。消費者運動が登場して10年、20年の頃、消費者運動は個人と社会をつなぐ社会運動になりうるのか? 消費は個々のものなので歴史的位置づけと理念をもたなければ、単なる苦情処理に終わらないかとしている——。再び消費者運動を考察したい。

中国山地の山村暮らし

1950年(昭和25年)2月生まれ。東京に住んでいたが、父の兄はレイテ島で戦死。祖母が亡くなり、祖父も病いに倒れたため、一家で山口県の日南村に帰郷した。私は4歳前。ベビーブームの時代でまわりにはたくさん子どもたちがいて、おなかをすかせていた。

記憶に残る古い光景は、自給自足の生活、お砂糖だけは1斤買いに出かけていたことを覚えている。富山の薬売りがやつてきて紙風船をもらった。ごみはでることがない。紙類は燃やし、生ごみなどはたい肥にする。お風呂のお湯もたい肥に利用した。缶詰の缶などは、年2回錆掛け屋さんがつてきて持っていた。車は見なかった。

小学校に上がり昭和30年代がはじまると、だんだん現金をもつ生活になっていった。村の中心にはお店が並んだ。そのなかに、電器屋さんも登場した。わが家にやってきた最初の家電製品は洗濯機だった。洗濯し、ローラーで水を絞った。次に登場したのは白黒テレビ。珍しくて面白くて、年末のNHK紅白歌合戦には、近所中の人が集まり、ふすま

を開け、30人ぐらいで見た。

村の中心からは少し遠いわが家には、日本海側の須佐からおばさんが山口線益田駅始発の汽車に乗り、自転車や魚などを売りに来てくれた。生活を変えたのはテレビと車とプラスチックだろうか。乳酸菌飲料が配達され購入、しかし、空き容器を畑で焼くと、刺激臭のある煙が出て黒い塊が残った。畑には戻せない、印象に残っている光景である。

農村は、昭和30年代から40年代はじめまでは米の増産だった。菜の花やれんげが美しかったが、化学肥料と農薬が多用された。小学校高学年になると、赤い旗が立っている田んぼには近寄るなど言われた。おたまじゃくし、カエルのにぎやかな声、蛭、とんぼ、蛇とだんだんに見なくなっていた(※1)。村では、いろいろなものを作っていた。肉牛、酪農羊の飼育、たばこの葉栽培など覚えている。

1971年(昭和46年)。一転して減反政策がとられ、ほ場整備がはじまった。私は、田んぼ、畑、山仕事に精を出す農村の娘だった。

山口大学社会学専攻科で知った消費者運動

山口高等学校に進学、その後、山口大学文学部に入リ学問の幅の広い社会学を専攻した。卒業すれば働きたかった。だが、当時(1968年〜1973年在籍)、女性は就職活動をしなくても4年生大卒はダメ、親元から通えないとダメ。結局、専攻科(1年課程)に進み、論文を書いたのが上記。助言は、山本陽三教授(農村社会学の権威)からいただいた。

「最近、面白い動きがある。消費者運動を取り上げてみてはどうか」と話された(※2)。

※1 農村は、有吉佐和子『複合汚染』(1974年〜75年「朝日」新聞連載)で描かれた状況そのままであった。

※2 当時、報道をにぎわしていたのはカラーテレビ二重価格表示問題だった。消費者団体が手をつないでがんばっていた。